

分断と団結

馬奈木 昭雄

池澤夏樹が、朝日新聞 12月5日付「終わり始まり」のなかで、「テロとの戦い」と題して、次のようなすどい指摘をしています。

「パリの事件は、先進国の都会に住む者にとっていかにも身近なことだけに衝撃が大きかった。ルバタ克蘭は武道館でもありえた。そう考えて東京の繁華街にいくらでもいる中東風の顔立ちの若者に対して警戒心を抱けば、我々はテロの首謀者の策謀に嵌ったことになる。彼らの目的は恐怖による分断だから。分断に対しては団結。事件の直後に「フランスは団結する」という言葉がオランド大統領の口から出た。エッフェル塔が三色旗の色にライトアップされた。」

「フランス人は異論が好きである。デモとストライキは日常茶飯事。」

「それでもこういう場合はやはりフランス人も団結するのだろうか。それは「イスラム国」に対する武力攻撃という形を取るのだろうか。フランス人が団結したことがある。2005年1月、イラクで新聞記者フロランス・オブナと彼女の助手・フセイン・ハヌーンが誘拐された。政府は初め二人に対して冷淡だったが、市民は熱烈な奪還運動を展開した。」

「157日の拘禁の後で解放された二人をシラク大統領が空港に出迎え、「これはフランス全体の喜びである」と演説した。大事なのはここでフランスがフロランスとフセインを写真や名前のサイズで同等に扱ったことである。フランス人とイラク人の間に区別はないし記者と助手＝運転手の間にも区別はない。それがフランスの国是「エガリテ＝平等」の真意だと彼らはアピールした。2003年11月29日にイラクで奥克彦大使と井ノ上正盛一等書記官が殺された。その時に一緒に犠牲になったイラク人の運転手ジョルジース・スレイマーン・ズラの名を日本のメディアはほとんど報道しなかった。2004年4月、高遠菜穂子さん、郡山総一郎さん、今井紀明さんの三人がイラクで誘拐された。ボランティア仲間の支援で無事に帰還できた三人を我々日本人は「自己責任」という言葉で徹底的に「バッシング」した。」

「フロランスとフセインの場合、高遠と郡山と今井の場合、何が違ったのだ

ろう。個人の意思をまとめる民主主義の結果と言いたいが、実際にはメディアの誘導効果が大きい。」

「日本のメディアが申し合わせたように三人を見捨てたのは、政府の意向に沿うものではなかったのか。今回のパリの事件について安倍首相は「テロには屈しない」というメッセージを出した。勇壮にして内容空疎、と呼んではいけない。日本人が人質になっても日本政府は救出の努力は一切しないという意味なのだ。海外に出る時も、また国内で呑気に暮らしている時も、保護はないと覚悟しておこう。」

この池澤のするどい指摘に、あらためて安倍首相に代表される「日本国」の「自国の国民に対する冷たさ」を痛感します。原発や有明訴訟においてしかり。石木ダムにおいてもまたしかり。「自国民と、対抗関係にある他国民を公平に対応する」という「高度」なレベルの議論とくらべることにすら恥しい行為が平然と実行されているのです。自国民間を「分断・差別する」対応こそが国策（自らのわがまま勝手なお友達だけを優遇する行為）を遂行する最も有効な手段と確信して、「恥の感覚すらほうり投げて」、「実行できる政治」と称して一直線につき進む。現に生じている福島住民や有明漁民の被害をまったく無視し、否定し、「開門によって将来おきるかも知れない被害」、「ありもしない電力不足による被害」「佐世保市民の水不足による被害」をただひたすら強調する。その結果被害をうける住民同士が相争うこととなり、権力とお友達の「利権集団」は安泰のうちに、ますます「金もうけ」を進め続けているのです。水俣でもこれが露骨に行われ、水俣病患者は「水俣市民」の利益を侵害する者として敵視されました。

私はこれまで、私が参加してきた「水俣」、「有明」、「原発反対」などのたたかいが、「ものごとを決定するのは誰なのか」。すなわち、「官僚がこの国の意思を決定する」のではなく、「国民の意思、被害者の意思が決定する」社会の実現をめざしているだと考えてきました。すなわちそれこそが「国民主権」なのであり、この実現こそが日本国憲法を現実のものとするのだと考えてきたのです。

今戦争法を阻止し廃止を求める戦いが全国的に展開されるなかで、安倍政治

は「憲法違反を平然と行うのだ」「民主主義など考えてもいないのだ」ということが国民的合意になりつつあります。有明訴訟でも、国は、福岡高裁の請求異議事件において、「国民の権利（たとえば漁業権）は国が作り出して国民に（たとえば漁民）に与えたものであり、国の方針によって（たとえば安倍政権に抵抗する漁民に対しては）、いつでも取りあげることができる（確定判決の根拠となった漁業権もその根拠を失い、その結果、有明の開門を命じた決定もその効力を失う）」と平然と主張しています。私はこの国の主張の意味は、「国民」ではなく「臣民」と書きかえた方がより正確になる、と理解しています。まさに安倍首相がいう「美しい国を取り戻す」という大日本帝国憲法が支配する世界です。「今から取り戻す」のではなく、日本国憲法の改正手続をとるまでもなく、すでに現実に着々と実行しているのだと思います。

私たちの進むべき道はただひとつ、「国民主権」をまもりぬくたたかいを地域で、職場で展開することだと思うのです。小さな声でもいい、ともかく自ら1人1人が声をあげさえすれば、その声は必ず国民的合意形成の大きなうねりになると信じているのです。それは安倍自公政権を打倒する力でもあるはずです。